



イントロダクション

我々は実に多くの倫理的問題に直面したり、見聞きしたりしています。2011年の初めには京大受験生が携帯電話でインターネットの質問サイトに受験問題を送り回答を得ると云う事件が起きました。その前には、三菱自動車のリコール隠し、白い恋人たちの石屋製菓の賞味期限の改ざん、ミート・ホープ社が牛肉だと云って色々な混合肉のひき肉を売る事件もありました。不二家製菓は使用期限の切れた牛乳を使って、シュークリームを作ったとして手ひどいペナルティーを受けました。

『アメリカ CEO の犯罪』¹⁾ という本を読むとエンロンを始めとして多くの企業の不祥事が載っています。その中にはGEのジャック・ウェルチも含まれています。ジャック・ウェルチはGE中興の祖と云われ、名経営者とうたわれましたが、給与のほかに法外な生活費と云うものをとっていた、しかもCEO引退後もとっていたと云うことで糾弾されました。彼は糟糠の妻を離縁して若い美人の奥さんと結婚したのですが、この奥さんが弁護士であった。この人とも離婚するのですが、奥さんで弁護士ですから、内情は良く知っていた。従って、本来もらうべきでない収入を得ていたとチクられた

わけです。皆さんも弁護士と離婚する時は要注意です。

余計なお話をします。私は若い時に、ジャック・ウェルチに会っています。ウェルチが偉くなったのは最初「ノリル」と云うプラスチックの販売に功績があったからです。GEでPP0という合成樹脂が発明されました。ところが、この樹脂は融点が高くて加工し難くて使いづらい。そのPP0をポリスチレンと混ぜると加工しやすくなると云うことが、また発明されました。この発明をしたのは別の技術者ですが、この混合プラスチックのノリルを売りまくったのがウェルチです。ウェルチは偉くなりましたがPP0の発明者のヘイの方はGEではあまり出世せず最後はカナダの大学の先生になったようです。

このPP0、ノリルの技術ライセンスをすると云うので合成樹脂事業部長になっていたウェルチが日本に乗りこんできました。1967年ごろの話です。まだ32歳の若さです。私は36歳、やっと課長になったか、ならないかの頃です。ウェルチが来て私が通訳をいたしました。その頃の三菱江戸川化学はまだ小さな会社でウェルチからは相手にしないと云うような態度で扱われていました。とにかく何トン売るといような計

画書をでっちあげ見せるとまあ相手にしてやろうと云うことになった。前の晩にホテルオークラで接待をします。そのころはまだ高価であったシーバス・リーガルを副部長のフィッツジェラルドと二人でがぶがぶ飲む。Long boots を履いていると云うのは「大酒を飲む」の俗語です。機嫌が良くなって私に俺のことをジャックと呼んでいいよという。

次の日に会社へ来て正式交渉となりました。するとライセンスの条件はPPOの原末樹脂を年間500トン買うことを約束することだという。社長が前向きに検討するから少し待ってもらえという。前向きになどという英語は知りませんから、良く検討するからという。「列車は出てしまった。お前たちは後の列車まで待たなければならない」と云って帰ってしまった。結局どこのメーカーとも話がまとまらずライセンスを受けたのは商社です。ずいぶん傲岸な奴だと思いました。もしかするとウェルチも若くて肩肘張ってやってきたのかもしれませんが。ウェルチとの関係はまたあとで起こりますが、それはもっと余計な話です。

どうして悪いのか

さて皆さん、色々な事件について悪いと云って断罪するのは簡単です。しかし、どうして悪いのかと云われると意外に答えられないことがあります。京大受験の予備校生はどうして悪いのでしょうか。英語の試験で和文英訳の問題を流したようですが、もし彼が大学受験でなく、大学のゼミの宿題で、質問サイトを利用したらどうでしょうか。もし会社のマニュアルの翻訳を命じられていて質問サイトを使ったらどうし

ようか。

使用期限を一日過ぎた牛乳を使った不二家の工場長はどうでしょうか。もしこの牛乳がほとんど細菌で汚染されていなかったら、捨ててしまっただけではもったいないと云うことにはならないでしょうか。もし、牛乳をそのまま下水に流したら排水汚染の問題を起こします。

石屋製菓でも、もし品質が落ちていなかったら、廃棄するのはもったいないことになります。ソマリアで何十万、もしかしたら何百万の人が飢えている。賞味期限切れの白い恋人たち（多少味が落ちているとしても）をあげたら飢え死にする人が多数救われるかもしれない。ミート・ホープはどこが悪いのでしょうか。もし、この社長が牛肉と云って売らないで、牛肉風混合肉と云って売っていたらどうでしょうか。この人は挽き肉機械の発明で賞をとっています。色々な肉を混ぜて牛肉と云ってばれないのは相当な技術であると私は思うのですが。消費者の方もハンバーグやメンチカツにしたら牛肉だか、混合肉だか、解らないのではないのでしょうか。クジラ肉がこんなに貴重品になる前、牛肉大和煮風クジラの缶詰というのがありました。

倫理的に考えようとする時に二つの倫理がぶつかる時があります。上記の例のように、「嘘をついてはいけない」と云う倫理と、「もったいないことをしてはいけない」と云う倫理の衝突です。倫理問題とは中々一筋縄では行かないということです。

マイケル・サンデルの白熱教室

さてマイケル・サンデルがハーバード白熱教室で有名なのは皆さんご存知と思いま

す。彼の講義はNHKのテレビで放送されましたし、また東大で同じような講義をやって放送されたのでご覧になった方もおられると思います。彼の講義がこれだけ評判になったのは一見そんな大問題ではないと云う設問を通じて、皆に考えさせ討論させるためです。こうした講義は彼の『これからの「正義」の話をしよう』²⁾という本にまとめられています。彼の講義の面白いのは、質問をして学生に色々な意見を言わせ、決して断定的に一定の見解を押し付けないことです。私もこの講義で、こうすべきだとか、こうしてはならないと云うことは申し上げないつもりです。ただ、こういう問題にはこういう考え方があると云うことを説明するだけです。

マイケル・サンデルの本に最初に出てくる話は次のようです。暴走する列車がある。運転士が見ると線路上に4人の工夫が居る。このままでは避難は間に合わず、4人をひき殺すことになる。ふと見ると退避線がある。そちらの線路上には一人しかいない。退避線に列車を入れれば一人の犠牲で済む。こんな設定だったと思います。4人より一人の犠牲者を選ぶのは功利主義的な考え方でしょう。功利主義というのはあとでもう少し詳しく説明しますが、要するに世の中の幸福の量と云うものは測定できるとして、その幸福の量の総計を最大にしようとする考え方です。菅元首相が「最小不幸社会」ということを云いましたが、これは功利主義を裏返しに表現しただけで、功利主義そのものでしょう。

もう一つの設定は、あなたがふと見ると跨線橋の端に小錦みたいな大男が足をぶらぶらさせて座っている。この男をつき落と

せば列車が止まることは解っている。退避線はないと仮定しても良いでしょう。ここでも、小錦さんを落とせば4人の命が救われます。あなたならどうしますか。人間を道具として扱ってはいけないと云ったカントは何と言うでしょう。

倫理とは何だろう

さて本題に戻って、倫理とは一体何でありましょうか。

倫理のほかに道徳という言葉もあります。今日の用法では倫理と道徳は根本的な違いはないとされます。倫理の倫は仲間を意味するということです。人倫とは人間特有の共同生活のあり様を意味するとされます。倫理とは人倫の原理を意味するとされますから、人間に特有な共同生活の原理ということになります³⁾。これだけでは良く解りませんが、人間が共同生活をうまくやっていくための原理ということでしょうか。

一方道徳には英語の *morality*、ドイツ語の *Moralitaet* の訳語、倫理は英語の *ethics* ドイツ語の *Ethik* や *Sittlichkeit* の訳語としての意味が強いともされます。そこで英語の辞書を引くと *morals* は「個人や社会が正しい、適切または受容できると信じる行動のあり方に基づく原則や価値」とあります。また *ethics* は「グループや人々の生活の行動、態度、考え方に影響する理念、道徳信条」となっています(Collins Cobuild English Language Dictionary)。Ethics の例としては、アメリカの拡大と機会の開拓倫理 (*frontier ethics*)、プロテスタントの勤労倫理が挙げられています。後者はマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』⁴⁾

と同じものと考えられますが、要するにまじめに勤勉に働くことが神様のみ旨にかなうものであると云う倫理でしょう。これは日本では鈴木正三や石田梅岩の考え方に通じるものがあります。

一方アメリカの開拓時代の倫理では、未知の世界を開拓し開拓民の世界をどんどん拡大する、チャンスがあればそれに飛びつくことが良いことだったわけです。しかし、開拓民にとって未知の世界は、先住民にとっては既知の世界であった。従って、ヨーロッパからの人間が自分たちの土地に入ってくるのは迷惑な話だったわけです。アメリカの開拓時代の倫理が正しかったかという、今では反省が行われていると思います。昔の西部劇と云うとインディアンが一方向的に悪くて、それをやっつける騎兵隊に拍手が送られると云うものでしたが、今はこういうものはなくなっていると思います。つまり倫理の考え方は時代や環境とともに変わると云うことが言えましょう。

倫理とは何かというと、人間としてやってはいけないこと、やらなければいけないこと、やったほうがよいこと等の決まりとでもいえましょう。そういうことを考えるとき、もっと根源的に人間とは一体何であるのだろう、人間は動物とどう違うのだろうとか、私とは何だろう、私は何のために生きているのだろうといった疑問が浮かびます。それを考えるのが哲学だとすれば、哲学と倫理学の境界ははっきりしないと云うことになります。多くの倫理学者が哲学者と呼ばれる理由もそこにあります。

人間は倫理について古代から考えてきた

人間は何をなすべきか、何をしてはならないか、について西欧ではローマ・ギリシャ時代から考えてきました。また、儒教の元である孔子の教えや、仏教においても人間がなすべきことの教えが含まれています。しかし、明治以降、輸入が図られた西欧の倫理学にせよ、儒教や仏教の教えにせよ、日本古来のものではなく、外来思想です。現在われわれが持っている倫理思想というものは、日本古来の考え、日本の風俗習慣に基づく考え方、それに外来思想が混合されて出来上がったものといえましょう。ただ例外が江戸時代でそこでは日本独自の考え方が生まれたと云う話は後でします。

西欧の倫理思想を見ると、宗教の影響が色濃く見られます。具体的にいうと、キリスト教の影響ですし、その元を尋ねるとユダヤ教です。イスラム教についてはよく知らないので深くは言及できませんが、中東諸国を見ると倫理がイスラム教の影響を受けているというより、イスラム教の実践が生活そのものである、つまり倫理とは宗教の教えそのものであるという気がします。イスラム原理主義と呼ばれるものは、イスラム教の教えそのものを実践する主義ということでしょう。もっとも、外国からの飛行機がサウジ・アラビアの飛行場に近づくとそれまで西欧風の服装で肌を出していた女性が、急に服装を変えて肌を隠し、顔を隠すのを見ると、少なくとも西欧文化に親しんだ人たちは表と裏の使い分けをしているように思われます。

また同じイスラム教の敬虔な信徒であるインドネシア人をみると、お酒に関する禁忌についてはサウジ・アラビアなどより厳

しくなくて、上流階級の人是我々との付き合いではビールくらいは飲みます。砂漠の宗教である厳しいイスラム教も、木が生い茂る熱帯に来れば穏やかになると云うことでしょうか。

日本の倫理思想

さて、それでは「日本の倫理思想とは何だ」、といわれると困ってしまうことがひとつあります。それは、儒教にせよ仏教にせよ膨大な典籍があり、西欧の伝統では、たとえばアリストテレスの『ニコマコス倫理学』⁵⁾は訳文の本文だけでも 500 頁もあるのに対し、日本では書かれた規範というものはほとんどないからです。山本七平によると「何れの社会であれ、その社会には伝統的な社会構造があり、それが各人の精神構造と対応する形で動いており、そこにそれぞれの原則がある。その社会における原則が外部にとっては『見えざる原則』であっても、内部においては当然自明の原則であり、それを少しも隠さずに堂々とそれで動いている。ところが日本ではその『見えざる原則』もまた一種の『ホンネ』として、互いのそれを口にしないこともまた『見えざる原則』になっているのだ」⁶⁾と言うことで見えざる原則が表に出てこないのです。

梅津という人は、日本の倫理学といえるものは、和辻哲郎の仕事が最初ではないかといっています⁷⁾。和辻哲郎の『人間の学としての倫理学』(岩波書店)は 1934 年(昭和 9 年)の出版『倫理学』上中下は 1937 年から 1947 年の出版です。そうすると日本には倫理は昭和にならないと存在しなかったのでしょうか。そんなわけはありません。人間が社会を作っている限り、そこに何ら

かの倫理が存在しなければ、みなそれぞれ勝手なことをして收拾がつかなくなるはずで。そうならないのは、何らかの倫理規定が、たとえ書いたものでなくても存在し、それが大方守られているからだといえます。たとえ、互いに口にしないことが「見えざる原則」としても原則が無いと云うことにはなりません。

例えば、東北大震災の際、大部分の日本人は整然と行動し、配給物資を受け取るのに喧嘩が起きると云うこともなく、各国の称賛を受けました。1970 年代のニューヨーク大停電では、ハーレムでショーウィンドウを破って中のものを持ち去ると云うことが大々的におきましたし、ハリケーンカトリナでもニューオーリンズで問題が起きています。勿論日本でも全く問題が起きていないわけではありませんが、大部分の人たちは倫理的に行動していたと考えられます。そうすると整然と行動していた人たちを律する倫理は何なのかということになります。

神道と日本の神様

西欧における倫理規定はキリスト教の影響を大きく受けていると申しました。日本の倫理は、古来の宗教である神道の影響を受けているのでしょうか。仮にそうであると、神道とは何かということになります。

ところが困ったことには神道には教典と呼ばれるものがないのです。祝詞というものがあります。これは、もともとは神様のご託宣であったが、今は神様をたたえ、神様をお願いするものとされています。「払いたまえ清めたまえとかしこみかしこみ申す」というのはそれでしょう。しかし祝詞

が神道の教義・信条を現しているとは思えません。それでは日本の神様とは何であるかという、これまた良く解りません。しかし、日本の神様が常に良いことをするとは限らないようです。「悪しき」「あやしき」働きをすることもある⁸⁾。疫病とか、天候不順、洪水や地震などは神様のたたりと考えられていました。

現在でも多くの神社があります。そのご神体を考えると3つに分かれるようです。その一つは何か良く解らないけれども神聖なもの、自然に神々しく感じるものです。出羽3山ではご神体は山です。また岩や神聖な場所がご神体であるものなどがこの分類に入ります。その二はたたりが無いように祀られるものです。典型例は天神様です。菅原道真が讒言によって九州へ流された。道真の死後京都では天変地異が起こった。人々は、これは菅原道真の亡霊のたたりだとして、これを祀った。これが天満宮の始まりとされます。その三は何か特別の能力や功績のあった人です。明治天皇は明治神宮に祀られていますし、東郷神社や乃木神社もある。

司馬遼太郎の『この国のかたち』⁹⁾という本にポンペの神社という話があります。司馬遼太郎がある家に行ったら庭に祠のようなものがあつた。そこであれは何かと聞くとポンペ様をお祀りしてあるのだという。ポンペと云う人はシーボルトなどより後に日本に来たお医者さんで、このお祀りした人の先祖がポンペ先生に大変お世話になった。そこでポンペ様をお祀りしてあるのだという。これを聞いて司馬遼太郎が神道というものを翻然として悟ったと云うようなことだった記憶しています。つまり日本の

神様は有難いものは何でも祀ってしまうと云うことのようにです。祀ることに意義があるわけですから、そこからは神様の教えとして倫理基準は出てこないと云えるのではないのでしょうか。

日本人の宗教観

この機会に、日本人にとって宗教とは何であるかを少し考えてみたいと思います。日本人は赤ん坊が生まれると神社にお宮参りし、結婚式はキリスト教で挙げ、死ぬときはお寺の世話になる、なんと信仰のない国民だと云う批判が一方にあります。ところが、これはどこかの国の大使の感想だったと思いますが、日本では大変多くの方が、通りかかると神社仏閣に皆手を合わせている、何と敬虔な人たちであろうと思ったと云う話があります。皆さんはこのどちらに賛同されますか。

私の考える平均的日本人の宗教感というものは多神教ということだと思います。多神教というとギリシャ・ローマ時代です。ギリシャ・ローマ時代というと実にたくさんの方の神様が存在します。皆さんがご承知のものだけでも太陽神アポロ、お酒の神様バックス、火と鍛冶の神バルカン、海の神様ポセイドン、地球を支えるガイア、美の神様ヴィーナス、とにかく数限りなく神様が居てとても覚えきれないほどです。ギリシャ・ローマの神様の特徴は其々役割があることです¹⁰⁾。つまり、万能の神が一人いるわけではなくて、役割分担がある。

日本の神様もこれに近いと思います。日本では八百万の神と云いますからとにかく数が多い。これに加えて仏教があります。仏教でも色々な仏様がいます。釈迦如来、

大日如来とか薬師如来があり、弥勒菩薩、観世音菩薩、勢至菩薩、日光・月光菩薩など沢山の菩薩が居ます。その他多聞天・増長天などの四天王、十二神将など、つまり仏教も多神教です。ややこしいのは仏教が奈良時代に国教として採用されたことです。しかし、今までの日本土着の神様を捨てるわけにはいかない。そこで苦し紛れに考え出されたのが本地垂迹説というものです。そもそも仏教が本筋なのだけれど、仏教の神たちが日本に天下ってきて、その地の姿で現れたのが日本の神様だと云うのです。だから、明治になって廃仏希釈と云うことが起きるまでは、仏様と神様は共存していた。今でも京都の清水に行かれると、お寺の境内に地主神社というのがあって縁結びの神様として繁盛しています。

日本の神様も役割分担があります。例えば十日えびすで有名な戎神社は商売繁盛の神様ですし、安産の神様、学問の神様、交通安全の神様、中には飛行神社もあってプロペラが祭られているなどがあります。ギリシャ・ローマ時代では人は当然願ひ事によって其々の専門の神様にお参りしたのでしょう。日本でもそういうことだと思いません。こういう言い方をするとキリスト教徒の方には大変申し訳ないことになりますが、普通の日本人にとって、キリスト教の神様はバレンタインの時の神様であり、クリスマスの神様であり、結婚式の神様である。こう考えると赤ん坊が生まれたらお宮参りに行き、結婚式はキリスト教でやり、死んだらお寺で葬式をやると云うのは其々の役目の神様をお願いすることであり、日本人にとっては違和感のないことで、それをとがめるのは一神教的な考え方ということに

なります。だから、お宮参り、結婚式、葬式と神社仏閣で手を合わせるのは別に矛盾していないことになります。申し訳ないのは一神教であるキリスト教の神様を多神教の中に入れてしまったことです。

私はどちらが正しいなどと云うつもりはありません。ただこう考えると、日本人の宗教観を矛盾なく説明できるのではないかと云うことです。なお、世界の大宗教で一神教はユダヤ教、キリスト教、イスラム教しかありません。キリスト教・イスラム教もユダヤ教から出たものとすれば、世界で一神教は一系統しかないことになります。つまり、多神教の方が普通ではないかということになります。ただ、キリスト教・イスラム教は信徒の数が非常に多いのが特徴ですし、一人の神様が全てをつかさどると云う思想はまことに美しいとも思います。

仮に、多神教を許容するとして、日本人のその時々で違う神様をお願いする、悪く言えば神様を利用することを認めるとしても、そこから倫理基準が出てくるわけではありません。

倫理に関する日本人の考え方の一つを梅津と云う人はこう言っています。「倫理の本を読んでいてどうして宇宙論や存在論の分野の記述が出てくるのかという私の疑問は、ある時一瞬にして解決されることになります。それは日本を含む東洋の倫理思想では宇宙論が即倫理思想なのだ」と云うことです。即ち、ものがどうあるべきかという『べき論』は論証やルールの体系、原則と云ったものであてられるのではなく、自然のあり方そのものの中にすでに存在しているのだと云う考え方が伝統的にあると云うことなのだと思えます」¹¹⁾。

天然自然すなわち宇宙の中に秩序があり、人間はその秩序に従って生きるのが自然であるという考え方はのちに述べます。倫理基準は自然の中にすでに存在していると云う考え方は、カントに通じるところがありますがそれはまた、後の講義でやります。

ただ日本流と厳密な倫理思想を構築したカントとの違いは、日本では「倫理学・哲学などといういかめしい理性のいとなみよりも、文学や芸術に求められる感受性が大切であり、自然と調和して生きる美学の方が倫理学よりも重要視される」¹²⁾ ことにあるようです。この伝統は日本の作文教育、特に小学校の作文教育に残っていて、情緒・感性の方が論理より重要視されています。

書かれた倫理規定

我が国において書かれたもので倫理規範に関係あるものとして、古くは聖徳太子の有名な17条の憲法(604年)があります。これは官吏の守るべきものとされますから、官僚服務規定、または官吏勤務心得と云ったものです。

第1条が有名な「和を以って尊しとす」です。「逆らうことなきをむねとせよ」とつづきます。争いごとを起こすなども読めませんが、君主や父親に従えということでもあります。第2条は「仏教を尊重せよ」です。第3条 天皇の命令に従え。第4条 礼を基本とせよ。第5条 貪り、欲心を捨てよ(賄賂をとってはならない)。第6条 勸善懲悪。何が善で何が悪かは明確ではありませんがへつらいを戒めています。第7条 職務内容を忠実に履行せよ。第8条 官吏は早く出勤し遅くまで仕事をせよ。第9条 信(真心)

を基本とせよ。第10条 心の中の怒りも表に出す怒りも捨てよ。第11条 信賞必罰。第12条 勝手に税をとるな。第13条 職掌を熟知せよ。第14条 官吏は嫉妬心を持つてはならない。第15条 私心を捨て公務に励め。第16条 人民を使役するには時期を考えよ。第17条 何事も自分だけで判断せず論議せよ。

この中で君主や父親の云うことに従えと云うのは儒教的考えでしょう。そのほか礼と信を基本とせよ、も儒教的考えでしょう。怒ってはならない、嫉妬心を持つてはならない、和を大切に争わず、欲心を持つてはならない。私心を捨てて公務に励め、は滅私奉公として戦時中の標語にもなりました。

最澄の著述による十重戒(818年)¹³⁾は不殺生(殺さない)、不滄盜(盗まない)、不淫(性的交渉をしない)、不妄語(嘘をつかない)、不沽酒(酒を売らない)、不説四衆過罪(僧や俗人の罪過を吹聴しない)、不自讃毀他(自慢せず他人をそしらない)、不慳借加毀(物惜しみをして他人に危害を加えない)、不瞋心受悔(怒らず反省を忘れない)、不謗三宝(三宝をそしらない)であります。

慈雲飲光(じうんおんこう)(1718-1804)は、江戸時代後期に活躍した真言宗の高僧ですが、一宗派だけにとらわれず、顕教・密教と幅広く学びました。その結果辿り着いたのが「正法律」で十善戒(みだりに殺傷するな。盗みをするな。みだらな性関係を持つな。嘘をつくな。馬鹿なことを言うな。人の悪口を言うな。二枚舌を使うな。ケチと貪りをするな。怒るな。憎しみを持つな。間違った固定観念にとらわれるな)でありました。

この二つに共通するのは、

①人を殺すな、②盗むな、③みだらな性関係を持つな、④嘘をつくな、⑤人の悪口を言うな、⑥ケチと貪りをするな、⑦怒るな、でしょうか。そのほかに「自慢したり他人をそしったりするな」、「憎しみを持つな」も倫理規定になりえましょう。

これをモーゼの十戒と比べると十戒の①②③④は神様に関することです。別にする、「父母を敬え、殺すな、姦淫するな、盗むな、嘘を云うな、貪るな」であり、上記の仏教の教えと、「殺すな、姦淫するな、盗むな、嘘を云うな、貪るな」で一致します。こうして見ると人間が守るべき基本的な倫理規定は、宗教人種を超えて変わりはないと云うことになりそうです。『アメリカCEOの犯罪』のミルズ教授はどん底の倫理として「誠実さのような基本的な価値や、食欲のような基本的な資質が支配している領域の問題である。社会的な懸念よりも一つ下の段階の領域の問題である。我々は十戒の領域にいるのだ」と云っています¹⁴⁾。ほとんどの企業不祥事と呼ばれるものは、「盗むな、嘘を云うな、貪るな」で始末がつかます。

我々を縛っているもの

しかし、我々を縛っているものは、これらだけではないようです。良い悪いは別にして韓国へ行くと日本との違いを痛感させられます。韓国では儒教の影響が大きいので、年上に対する尊重の度合いが違います。若者は年長者に云われるまでは、決して座りませんし、煙草も良いと云われるまでは吸いません。またお酒は息がかかるのが失礼だとして横を向いて飲みます。韓国の若

者が日本の電車に乗ると年寄りに席を譲る人が少なく驚くそうです。国という一つの集団によって倫理基準が異なるわけです。

そこで、もう一度原則に帰って、倫理がどうして発生したかを考えます。関谷と云う人は、倫理の発生を原始人たちが「集団の力」を発見したことに求めます。集団の力をより一層発揮させるためには、構成員はお互いに助け合わねばなりません。すると「助け合うべきとか協力すべき」という倫理的価値が生まれます。また集団の力をより有効に発揮させるためには有能な指導者のもとに構成員のエネルギーを結集することが求められます。ここに権力が発生し、命令と服従の関係が生じます。ここに服従という倫理的価値が生まれます¹⁵⁾。つまり有能な指導者には従うべきだと云うことが倫理的価値になると云うことです。確かに大きな石に綱をかけて引っ張る時、音頭取りの掛け声に合わせて一斉に引かなければ、石は動かないでしょう。

そうすると、倫理的価値はある共通の利害関係を持った集団に属することになります。村八分という言葉がありますが、村という共通利害集団の中で、一人異質な行為をするものが居る時、つまり村の共通の掟(倫理)を破ったものが居る時、それを排除するという行為が村八分なのでしょう。日本の倫理を考えると云うことは、日本という集団、日本村の中の掟は何なのかを考えると云うことでしょう。

山本七平の『日本資本主義の精神』

繰り返して申し上げますが、我々は共通の掟を書いたものとしては持っていないところが問題です。書かれざる論理、倫理を

追求したと思われるのが山本七平の『日本資本主義の精神』という本です。山本七平と云う人は博覧強記、大変な人です。イザヤ・ベンダサンという筆名で『ユダヤ人と日本人』と云う本を書いています。ユダヤ教とキリスト教に非常に詳しい人らしい。しかし、この『日本資本主義の精神』という本では江戸時代の習慣から、思想まで幅広く論じています。またそれをイスラム教との比較で論じるなど真に広い教養と、深い知識を持った人です。私は昭和の生んだ天才として、司馬遼太郎、吉川英治、山本七平の三人を思い浮かべますが、もしかしたら山本七平が最もすごいかもしれない。

この本には色々なことが書いてあって、文庫本で230頁ほどのものながら中々一口で説明できるものではありません。

会社は運命共同体である

しかし、その中で云っていることを私なりにまとめると、次のようになります。

倫理的価値はある共通の利害関係を持った集団に属すると申しました。確かに、我々は日本国という集団に属しています。しかし、利害関係ということになると、日本人すべての利害関係が一致しているわけではないでしょう。我々はこういった利害集団に属しているのでしょうか。

そこで山本七平は機能集団と運命共同体ということをやっています。これはドイツ語で云う Gesellschaft と Gemeinschaft に相当するものでしょう。ところで、日本の会社はこの機能集団と運命共同体との両面を持っていると云うのです。機能集団というのは言うまでもなく、何かの商売をして利益を上げると云う目的で動く集団という

意味です。その前に運命共同体ということをやると、例えば農村があります。村で水田を作っていれば水の管理が共通の利害になるでしょうし、一人怠けものが居て雑草を生やせばその種が飛んできて、近隣の迷惑になるかも知れない。

今回の東北大地震を見ても、魚業関係者は運命共同体にあるようです。仮設住宅に入った人たちがもとの近隣の人たちと同じ場所で住みたいと云っているのをみると地域社会が、重要な役割、運命共同体を生成していたと云うことのようにです。

しかし、一方都会をみると地域共同体という概念は極めて薄いと思われまふ。私にしても、近所の何軒かの家の人とは会えば挨拶ぐらいしますが、名字すら知らない家がありますし、地域の活動に参加したことはありません。その一方、もう20年近くも前に辞めた会社の人たちとは今も付き合い合っています。会社、学校やその他の機関もそうですが、運命共同体であるという証拠は「うちの会社」と云う云い方だと思ひます。

西欧の会社では、こうした運命共同体という感覚はないとか薄いと云うことのようにです。例えばロンドンの郊外に住んでいる人たちにとって運命共同体は住んでいる地域社会であって、ロンドンにある会社は出稼ぎに行くところという感覚であると云ひます。これは日本でいけば農村から季節工として建設現場や自動車会社に出稼ぎに行く人の感覚と云えばわかりやすいでしょうか。出稼ぎに行く人にとって運命共同体はあくまで出身農村であって、鹿島建設でも大林組でもありません。ましてや下請けの下請けであるなら、会社の名前すら重要ではないでしょう。仕事をする場所さえあれ

ばよいのでどこの会社がつぶれるなど関係ないことです。

ロッキード社が田中首相にわいろを贈ったと云うロッキード事件で、日本の記者がロッキード社を訪ねた時誰も関心が無かったのでびっくりしたという話が載っています。ロッキード社の社員にとっては、ロッキード社は給料をくれるところで、自分の働きにあった給料をくれていれば、その他のことは関係ない或いは関心ないと云うことのようにです。

一方日本では、少なくとも都市では地域社会が運命共同体として機能していないことが、会社の運命共同体化の原因でしょうか。機能集団が運命共同体に転化するわけです。日本の会社が運命共同体としての性格を持っていることは終身雇用と年功序列に関係しています。現今の経済情勢では終身雇用は必ずしも守られない、また実力主義や成果主義などと云われて年功序列もあやしくなっているところに現在の混乱があるようですが、その一方正規社員と非正規社員の差別などに見られるように、一端正規社員になれば特権を獲得すると云う構造は変わっていません。

こうした年功序列や終身雇用制度は決して、近代になって出現したものではなく、江戸時代からの慣習であるとするのが山本七平の主張です。江戸時代は土農工商と云われ商人は最下位におかれていた。しかし、実際には大きな蓄財が起り、窮乏した藩は豪商からの借り入れに頼り、実質的には商人の地位はかなり高かったようです。商家の習慣が年功序列型であったと云います。

徳川時代、享保の頃(8代将軍吉宗の頃)、商店には、丁稚、手代、番頭、大番頭、宿

這入り、暖簾分け、という序列がありました。10代で無給の丁稚奉公に入ります。住み込みですから、食べることと住むところには困らない。だんだん出世して宿這入りになると住み込みではなく社宅通勤を認められます。暖簾分けでは、同じ屋号を使って独立することを許可されます。つまり年功が認められ蓄積され、最後はうまくいけば独立できるというわけです¹⁶⁾。この運命共同体に参加し、勤勉に働けば将来自分の会社の社長にも成れるかもしれない、ということで共同体に忠誠を誓うこととなります。

近年の会社の終身雇用というのも、これに似たものとなります。一つの会社に就職すると原則首になることはない。全ての人が社長になれるわけではないが、出来る人は子会社の社長くらいにはなれるかもしれない。そうでない人でも、年功(働いた年数)によって徐々に給料が上がって行く。年功序列制と云うと競争が無いと思う人もいますが、競争はもちろんあります。しかし、成績が悪いと云って首になるわけではない。そうした中では会社に忠誠をつくし、自分なりに勤勉に働くことが、個人の利益となります。そうすると運命共同体の利害が自分の利害と一致することとなります。これが終身雇用年功序列制と云われてきたものでしょう。

現今の情勢はどうかというと、会社も経営があやしくなるとは、雇用を保証することはできないという一面があります。しかし同時に、いったん雇用した人間を簡単には解雇できない、或いはしないと云う慣習は変わっていないようです。そうすると景気の変動によって人員調節ができないこと

になる。その調節機能を担っているのが、派遣やパートであると云うのが実情ではないでしょうか。それが、正規社員となれば一種の特権を享受することになると云うことになるわけです。派遣の人は派遣さんと呼ばれ、社員食堂すら使えないと云う話があります。そうすると正規社員にとっては「会社は運命共同体である」ということは変わっていないと云えるのではないのでしょうか。

運命共同体であると、「その共同体を裏切るな」という一つの倫理規定が発生します。或いは「共同体の名誉を守れ」という暗黙の規約が生じます。この規約は両面に働きます。共同体を裏切らない、名誉を守れと云うことで共同体のために良く働き、個人的にもおかしなことはしないと云うことになります。ところが、会社の恥をさらさないと云うことになると、会社の働いた不正もなるべく表に出さないことになる。こうした共同体を裏切らないと云う規範は不法集団にも存在します。例えば泥棒仲間が捕まっても、仲間の名前は出さないと云うものです。

契約より話し合いが優先する社会

もう一つの日本社会の特徴は契約より話し合いが優先すると云うことだとされています。そもそも一神教の世界では、神様との契約というものがある。従って、個人と個人との契約というものは必要が無かった。全ての人が神様と同じ契約をするのですから、人と人が契約をしなくても、すべてが同じルールで動いている、こういうことのようなのです。ですから例えばイスラム教の世界では無神論者は信用されないと云う

ことです。そこへ西洋のやり方、人間と人間の契約が入ってきたのは、せいぜい100年くらい前のことである¹⁷⁾ということのようです。この宗教における契約という問題はこれ以上深入りしません。

日本が、このごろは大分あやしくなってきましたが、終身雇用だと云うと、外国人は「どんな契約があるのですか？」と聞くそうです。ところが、私が会社に入った時そんな契約をした覚えはありませんし、社員規則みたいなものを渡されたのも入社後であったと思います。もし、終身雇用契約を要求していたら、そんなに会社を信用できない人は来ていないと云われるのが関の山でしょう。「極言すれば、日本の会社に就職するには、『では入ってください』『よろしくお願いします』以外に何もないし、なにも必要としないのである。それは、『今日から親子です』に等しい無条項の血縁的契約なのである」と山本七平は言っています¹⁸⁾。

あるフランス人の神父が日本に来て奉職した。彼はフランス人だからフランス式にやる。人を雇う場合は3年契約とか5年契約でやる。無契約は直ちに首にできるということである。無契約で働いていると云うことは、当然そのことを知っているはずであると云う理屈です。だがこのフランス人の常識は日本では通用しないと山本七平は言っています。なぜなら、日本人にとってそこで働くことと云うこと自体が「話し合い」の結果であって、その「話し合い」の消滅については、消滅に関する「話し合い」があるべきであり、契約が終わったから或いは契約が無いから、即解雇というような「一方的なこと」は認められないと云うことで

す¹⁹⁾。

この神父さんはフランス流を押し通して、問題を起こしたようですが、確かに私の経験でも、日本とアメリカで契約に関する考え方はずいぶん違っていたようです。アメリカとの契約では契約書は何十頁にも及びますが、日本の契約書はせいぜい数頁の場合が多い。そして必ず最後に何か問題が起こったら「双方誠意を持って」話し合うことが記載されています。アメリカ人に云わせればこんな契約は契約ではないのですが、少なくとも日本人同士では通用する。ただ問題が起きた時は、誠意あるいは善意を持って話し合うような状態ではなくなっている場合が多いので、結局力関係で決着がつくと云うのが実情だと私は思っていますが。

私の居た会社でアメリカの会社に技術ライセンスをすることになった。この会社にとっては戦後最初の事です。アメリカから送られてきた契約書には、問題が起きた時にはこう始末すると云うことがかなり細かく記載されていました。それを社長に報告すると「そんな悪いことを考えているのか。そんな会社とは契約できない」と云われました。別に悪いことを考えているのではない、但し、もし最悪の事態が起きると時にどう始末するかが書いてあるに過ぎないと云うことを説明するのに苦勞した覚えがあります。それでは話し合いがまず優先する日本でなぜ社員規則があるかという、むしろ結論が先にあって、その根拠を規則に求めると云うことのように。

何故「ブラブラしていること」が許されないか

もう一つの規範は「ブラブラしていること」を許さないと云うことです。我々の社会では「ブラブラしている」は一種非難の言葉です。何故ぶらぶらしていることが許されないのかというと、それは仏行を行っていないからだと云うことになります²⁰⁾。山本七平によれば「江戸時代は日本の歴史の中で最も興味のある時代であり、一言でいえば『日本人の自前の秩序』を確立した時代」であります。戦後のアメリカの真似の時代でもなければ、古代の中国のみが典拠の時代でもなかったと云っています。もしかしたら鎖国の効用かもしれません。外国の思想の受け売りをしようと思っても外来思想が入ってこないのですから。

この時代の石田梅岩、鈴木正三の二人が日本をつくった思想家とされます。鈴木正三と云う人は 1579 年生まれの武士ですが、1620 年切腹お家断絶覚悟で出家してしまっただけで、彼の時代は、戦国が治まり秩序が確立した時代でありました。そのことは「戦国武士」の存在理由が否定され「足軽から太閤へ」の夢も消えた一種の心理的閉塞状態を招いたものと考えられます。その一方「もう戦国はたくさんだ。何とかこの秩序を維持していかねばならない」という要請があり、この矛盾をどう解決するかが正三の時代の問題であったとされます²¹⁾。私の話していることは山本七平の書いていることの私なりの解釈であって、本当の鈴木正三の考えをお伝えできているかどうか、心配なのですが、次のようなことのように。

前に、日本を含む東洋の倫理思想では宇宙論が即倫理思想なのだと云うことを申し

上げました。ただそれを語らないのがまた特徴なのですが、鈴木正三の珍しいのはそれを言葉にしていることです。

彼は宇宙の本質は「一仏」であるとししました。この「本質としての一仏」は人間には見えないが、この仏には三つの「徳用」がありそれが人間に作用してくる故に人はその存在を知ることができる考えたとのことです。それを彼は「月なる仏」「心なる仏」「医王なる仏」の三つと表現しました。月とは天然自然の秩序を意味します。各人の心もこの天然自然の秩序を宿している、これを「心なる仏」と言ったわけです。人間は宇宙の秩序に組み入れられているのだから、当然、その内心の秩序も宇宙の秩序に即応しているはずだから、人間もこれに従っていればよいと云う人間観・宇宙観です。宇宙の秩序の心を各人が宿しており、それが仏の心ならば、この世に犯罪や不正はなく、全員が「ホトケ様」のようになるはずではないか。それがなぜそうならないのか、それが当時の思想家が持っていた問題意識とされます²²⁾。正三はこれを、心が病に冒されているからだと考えました。それは食欲、瞋恚、愚痴の三毒としました。食欲は欲張りですが、瞋恚は怒り恨むこと、愚痴は物事が解らずおろかなことを意味します。この病を癒してくれるのが「医王なる仏」でこの癒しを願うのが人間の宗教心であると考えました。こうして人が癒されれば、戦乱も起こらず、社会の問題も解決され、人間の集合である「衆生」もまた仏、という形で理想社会ができると考えました。

結論を急ぐと、皆が仏になるためには、心が病に冒されていてはいけない、そのためには修行即ち仏行に励まなければならな

い。では仏行に励むとは何なのだと云うことになります。農民が「仏行に励め」と云われても忙しくてとてもそんな暇はないどうしたらよいでしょうと聞いたところ、正三の答えは実に明確で「農業即仏行なり」でした。農業を修行と考えてそれに励むことが仏行なのであると云うことです²³⁾。

「世俗の行為は、それを修業することによって、宗教的行為になり得る」といった考え方は日本人に実に大きい影響を及ぼしたと、山本七平は言っています²⁴⁾。

こうなると先ほど述べた「ブラブラしている」は修業・仏行を行っていないとして非難されることになります。この自分の仕事に一生懸命励むのが神様のみ旨にかなうのだと云う考え方はヨーロッパにもあります。プロテスタントの勤労倫理というのがありました。要するに自分の職業に勤勉に励み、質素な生活を送ると云うことでしょう。

私は自分の職業に励むと云うと、アナトール・フランスの『聖母と道化師(軽業師)』²⁵⁾と云う小説を思い出します。道化師が、自分は教養が無くて御祈りの言葉もうまく言えない。貧乏で教会に寄付も出来ない。自分ができるのはジャグリングだけだ、自分が神様に捧げられるのはこれだけだと聖母像の前でジャグリングを始めます。一心不乱にジャグリングを長い間やっていると額に汗がわき出てきます。そうすると壇上の聖母像がしずしずと段を下りて道化師の額の汗をぬぐい給うと云った話だったと思います。

日本人の宗教性について山本七平が面白い見解を述べています。鈴木正三によると、人は皆仏性を持っているのだから、成仏、

すなわち自分が仏になるには「わが身を信じるを本意とす。誠、成仏を願人ならば唯自身を信ずべし。自身即ち仏なれば仏の心を信ずべし。仏に欲心なし、仏の心に瞋恚無し、仏の心に愚痴なし（後略）」ということになります。「ここで正三の云っていることは現代も律している貴重な言葉である。『日本人は無宗教』と云うのは驚くべき誤解であり、その宗教性が西欧と違うに過ぎない。正三には『唯一絶対神』は存在しない。正三にとって信仰とは絶対神を信じることではなく『唯自身を信ずべし』ということである。この信仰を今も日本人は持ち続けている」と山本七平は述べています²⁶⁾。「日本では『自分が信じられなくなった』と云えば、その人は社会的に失格する、それは日本においては信ずべきものは内なる仏であって、自己が責任を負うべき対象はそれなのである。そして責任を負うべき対象――それが『内なる仏』であれ『神』であれ――を喪失した人間は、いかなる社会もこれを信用しなくなるのは当然である」ということになります²⁷⁾。

石田梅岩のプラグマティズム

鈴木正三より石田梅岩の方が有名で、皆さんの中にも石田梅岩の名前を聞いたと云う方がおられると思います。ただし、石田梅岩がその考え方の基本を作った或いは基本を同じくしたと云う意味で山本七平が鈴木正三を取り上げているわけです。

それならば石田梅岩の思想とはどんなものであったかという、基本的には鈴木正三と同じとされます。

しかし、正三が仏教を基としたのに比べると、宗教色が薄いと云うか、宗教を基と

していないと云えるでしょう。宇宙の秩序と、内心の秩序と社会の秩序は一致しなければならない、という点では正三と表現が違っただけでほとんど同じとされます。しかし仏教をはっきり否定しているところが正三と異なります。正三が「医王」と云ったものを梅岩は「薬」と云っています。そしてそれは、「癒してください」と願う宗教的対象ではなく、処方して使うべき対象となっています²⁸⁾。そして孔子、孟子、老子、荘氏、仏典から日本の古典まで、自由自在に使って一向に差し支えないと考えていたと云うことです。「役に立つものが真理である」という行き方で、ある意味で完全なプラグマティズムとされています。彼は、宗教を思想流布の手段とみていました。彼にとって神儒仏の三教が併存することは一向に差し支えなく、併存流通を金銀銅の三通貨の併存流通にたとえています。(梅岩流なら)七五三は神社で、結婚式は教会で、葬式はお寺で一向差し支えないことになる、と山本七平は書いています²⁹⁾。

石田梅岩には宗教色が無く、また本人が生来の理屈者と云っているように何でも理詰めで考えなければ承服できなかったと云うことです。人間の本性とは何かを徹底的に考えたとされています。彼が「性」といったものは今日の「人間の本性」とか「人間性」とほぼ同義と解釈してよいが、当時の庶民には解りにくかったので弟子の手島堵安が「本心」と云い直しました。我々も「自分の本心に問うてみる」といった言い方をします。ところが「本心」とは何かと云われると、この存在を証明し、内容を明確に説明できるものはないであろうと山本七平は言っています³⁰⁾。

とにかく「本心」の学問であれば「神学」ならぬ「心学」ということで石田梅岩一派の学問は石門心学と呼ばれています。梅岩には「形は心なり」という発想がありました。馬が馬なりの形をしてそれで馬の生き方が決まるように、人は人の形によって生き方が決まる、割り切って行ってしまえばそういうことなのです。そこからどんな倫理が出てくるかという、示された形に従っていることを日本人は「自然」と感じると云うことです。日本には、社会の中の自然現象ともいべき「自然」という言葉がある。人間はこの自然現象の通りにしなければ「不自然」なのであるとされます。我々は「やり方が不自然だ」「言い方が不自然だ」という非難をします。「自然であるべき」は一種の倫理規定なのでしょう³¹⁾。

鈴木正三、石田梅岩の思想とその影響をかけ足で見てまいりました。石田梅岩も結論的には、自分の仕事に勤勉に取り組み、ということでは正三と異なりません。これに儉約が加わります。正三は坊さんですから、初めから奢侈贅沢という考えはなかったのかもしれませんが。しかし梅岩は今風にいえば商社のサラリーマンでした。そして重要なことは結果としての利潤を肯定していることです。日本でも一時商社不要論があったように、当時も商人否定論がありました。しかし正三も梅岩も商人擁護をしています。正三には流通重視といった意見が見られます。梅岩もその職業に誠心誠意尽くすことを説くわけですが、商売では「売り先」への誠実が第一であり、それには「儉約」を守ることが大事だとしています。今流でいえば経費節減・合理化でしょう。山本七平は、「世俗の業務に宗教的意義を感じ

て、すべてを度外視してこれに専念し、同時に合理性追求を人間の踏むべき道『倫理』と考えてこれを実行することで良心を満足させ、さらに儉約を行えば、その国には否応なく資本が蓄積し」と述べていますがこれはマックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」そのままではないでしょうか。

浪費・贅沢は罪悪である

儉約については、日本では「浪費・贅沢は罪悪なり」という発想が非常に強いとされています。確かに、石川島播磨・東芝の社長をやり、経団連の会長だった土光さんが晩飯のおかず目刺2匹で有名になりました。私もテレビで見ましたが、土光さんがもう一匹ないのかと云うようなことを云って、奥さんが焼いてないのならありますと云うと、もういいと云う光景が映っていました。たとえ収入があってもそれを私的に消費しないと云う自制を持っている人はそれだけで立派とされます。これをアメリカ人が見たらなんというのでしょうか。大会社の社長になっても、目刺2匹では何のために努力して社長になったのだと云うかもしれません。もっともアメリカにはアメリカンドリームを容認する代わりに寄付による社会貢献という別の規範がありますが。

梅岩の言う「儉約」は自制の倫理であり、またそれが商家という企業体の秩序の基本であるとする考え方とされています³²⁾。色々見てまいりましたが、表面に出てきたものとしては、一生懸命働き、自制心を持って贅沢はしないということが日本人の倫理であるとするようになります。もう少し哲学的なものとしては「本心に従え」「自然

に生きろ」がありますが、これを具体的に説明しろと云われると、また難しいことになります。

明治以降の倫理思想

今まで、現代日本の思想に大きな影響を及ぼしたと考えられる江戸時代の思想家の思想を見てまいりましたが、明治以降の倫理思想はどうなったのでしょうか。

末次はそれを、福沢諭吉の『文明論の概略』『学問のすすめ』、『教育勅語』『国民道徳論』、和辻哲郎の『倫理学』から検討しています。

福沢諭吉

福沢によると徳 moral には私徳と公德がある。moral とは「『心の行儀、すなわち、一人の心のうちに快く、人の見ないところでも恥ずかしいことをしないことである』とし、人の心のうちに属するものを私徳、外物に接して人間関係の上に現れるものを公德と云う」ということになります。そして福沢は智と徳を分けます。確かに知育と徳育と云う言葉があります。福沢は「徳はその性質において昔も今も同じであり、徳の及ぶ範囲は狭い。さらに徳に関することは形で教えることはできない」と云っています。「これに対して、知識は進歩してやむことなく、それが及ぶ範囲はたいへん広い」としています。福沢は智徳の区別をわきまえない道徳家たちを批判しているとのことでした。

しかし、これはなかなか微妙な問題です。我々は善悪の判断をするのに、知識を必要としないのでしょうか。例えば臓器移植の問題にしても、更に進んで iPS 細胞からどん

な臓器でもできると云う事態となった時、人間は神様の領域に入ってしまったと云うことにはならないでしょうか。その時の判断には高度の知識が必要になると思います。原子力発電を断罪するのは簡単ですが、それではエネルギー政策はどうするのか。太陽光発電のインプット/アウトプット係数はどうなるのか、電気自動車とハイブリッドカーではトータルのエネルギー効率はどうなるのか、ガスタービン発電の効率と二酸化炭素の発生量の関係はどうなるのか、こうした知識なしに、何が、我々にとって善であるかを判断するのはなかなか難しいことになります。ただ福沢諭吉の頃は、西欧の自然科学に対する知識の豊富さと、その進歩はすさまじく、また当時の道徳家と云われる人たちが、儒教に基づいた道徳を教えていたことに対する反発があったのかもしれない。これが知識の及ぶ範囲はたいへん広いと云う結論になったのではないかと思われま

す。ただし学問のすすめにおける福沢の人間理解の核心は、平等・自由・独立である、とされます。「人間は男も女もみな平等かつ自由である。しかし自由と云っても分限を知らなければ、わがままに陥りやすい。分限とは、天の道理に基づき、人の情に従い、他人の妨げをしないで、自分一身の自由を達することである。自由とわがままとの境界は他人の妨げをしないことである」

「自ら物事の理非を見分け、処置を誤らず、自ら心身を勞して生計を立てる人は他人の知恵や財に頼ることなく独立している。しかし、それだけでなく人々とともに力を尽くし、日本国に独立の地位を得させてはじめて内外の義務を終えたと云える」として

います³³⁾。人間平等かつ自由という思想は当時としては革新的だったのではないでしょうが。

教育勅語

教育勅語、正しくは「教育に関する勅語」と云いますが、明治23年10月30日下付されました。私の小学生のころは天皇陛下から下されたということで校長が白手袋で恭しく扱い、すべてこれに服さなければいけないということで、我々の年代では、あまり良い思い出としては残っていないと思います。しかし、今改めて読んでみると、そんなに悪いことばかり書いてあるわけでもありません。この起草にあたった井上毅(いのうえこわし)という人は、「立憲政体において君主は臣民の良心の自由に干渉してはならないので、『勅語』は政治上の命令としてではなく、君主の個人的著作とするべきである」と考えたようですが、結局命令となりました。しかし、その影響は最初の「朕推フニ」というところと最後の「朕、爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ」というところに現れていると思います。つまり「私が思うには」で始まって、「私もあなた方共々これを守って行こう」ということになっています。

内容はどうかというと「父母に孝行、兄弟仲良く、夫婦むつまじく、友達は信じあい、へりくだって自制し、博愛を人びとに向け、学問を収め、技術を習得し、それによって知能を開発し、倫理感のある人間になり」ですから別に悪いことを云っているわけでは全くありません。さらに、「進んで国家に課せられた任務に就き、世の中の務めを果たし、憲法を重んじ、国法に従い、一大事が起きれば、国のために尽くし」ま

では良いとして、「以テ天壤無窮ノ皇運を扶翼スベシ」は「これによって、永遠に続く皇室を補佐しなさい」ということですから、これは天皇に忠義を尽くせと云うことになって、現代では受け入れられないでしょう³⁴⁾。末次は「日本が万世一系の天皇によって統治されてきた世界に例のない優れた国である」という国家感が国民支配のイデオロギーに転じる要素を含んでいたとしています³⁵⁾。

国民道徳論

東大の教授であった井上哲次郎という人が明治43年に行った講演に基づく『国民道徳概論』が出版されると、「国民道徳」が高等学校や師範学校で必修科目となりました³⁶⁾。井上は西洋文明の長所と東洋文明の長所を融合させるべきであると云ったが、結局は古神道に基づく国体という国家観と儒教的な忠孝の教えが近代社会においても有効であることを示すに、西洋の倫理学説を利用することでしかなかったとされます。井上は『国民道徳概論』において総合家族という表現を用いているが、これは家族国家観と呼ばれるもので、「個々の家族を一団体とし、その上に家長があつて国を統率して行く、この家長は天皇である、法律上、一家族の家長と天皇は同じではないが、家族制度としての組織からみれば同じである。君臣の義だけではなく君臣の間には父子のような関係がある」というものだとされています。結局国家の家長である天皇に孝とは天皇に忠となると云う思想でしょうか。

和辻哲郎の倫理

和辻哲郎の倫理学においては『倫理』とは『秩序』とか『道』とか呼ばれる人間共同体の存在根底であり、そのように解される『倫理』を捉える学問が倫理学であると定義しました³⁷⁾。しかし、人間共同体の存在根底が何であるか定義しなければ、倫理を定義したことにはならないのではないのでしょうか。一応和辻の倫理定義が第一の特徴とすれば、第二の特徴は、人間と人間の間柄としての倫理学を打ち立てたこととされます。孤立的な個人の主観的な道德意識ではなく、人間共同体の存在の根底である秩序に貫かれている人間存在にあるとされます。人間が形成する社会は和辻によれば共同社会と利益社会からなります。これは山本七平の言う運命共同体と機能組織と同じことでしょう。利益社会は、約束や契約によって人間相互の関係が結ばれるのに対し、共同社会は歴史的風土的に規定され、世界化しない。共同社会は家族共同体、地縁的共同体、文化的なものを通して結ばれる友人たちの共同体、これら共同体を実質的に統一する国家を含むとされます。

第三の特徴は、国家概念です。己の利益を主張する諸個人によって形成され、個人の幸福の追求を原理とする国家が打算的国家と呼ばれ、ヨーロッパ諸国やアメリカがそれに該当します。それに対して、民族の全体性が聖なるものとしてとらえられ、絶対者とのつながりを保持している国家が本来の国家であるとされます。つまり(戦前の)日本が本来の国家であることとなります。こうなると何やら神がかった国粹主義に聞こえますが、今、和辻哲郎が生きていたら、現在の日本を何と呼ぶのでし

ょうか。

第四の特徴は、さまざまな共同体と国家との関係です。夫婦の共同体、兄弟の共同体、それらを含む家族共同体、そうした私人的性格を超えたところに地縁的共同体があります。しかし、地縁的共同体はよそ者を拒む私的性格を残しています。それを超えたところに文化共同体があります。しかし文化共同体にも民族の枠を超えられないと云う閉鎖的性格があります。それに対して国家は他の様々な、共同体と同じ平面にあるのではなく、それらを超えている。本来の国家がさまざまな共同体を人倫的組織として統一するのは諸共同体の私的性格を「公」に転じることとしてなされる。本来の国家は「公」そのものであるとされています³⁸⁾。和辻倫理学にはヘーゲルの影響が大きいと私は思うのですが、一方留学したドイツも打算的国家に入れているところをみるとドイツ留学も必ずしも幸福ではなかったのでしょうか。国家の性格は公とされますが、尖閣諸島や竹島をめぐる争いが起きるのは、国家の私的性格のためだと私は思います。和辻は何というのでしょうか。日本が本来の国家でなくなったからとでもいうのでしょうか。色々欠点があるとはいえ、私は戦前特に戦時中の日本より現在の日本の方がずっと好きですが。

公と私の問題

さてこの論文で末次が一貫して問題にしているのが、公と私の問題です。「私心を捨てて公務に励め」は17条の憲法に出てきます。福沢諭吉も、個人の独立が大切としましたが、それだけでなく人々とともに力を尽くし、日本国に独立の地位を得させては

じめて内外の義務を終えたと云える、としました。つまり公的貢献が必要であるとしたわけです。教育勅語では、勿論天皇への忠誠という意味がありますが公的貢献がうたわれています。『国民道徳論』でも忠という形の貢献がうたわれています。和辻倫理学でも私を超えることが、強調されています。

末次論文の結びでは突如小林よしのりが出てきます。簡単にいえば、戦時中の全てが悪いとする GHQ の教育方針から、あまりに個人が強調されて、公がおろそかになりエゴ的私が横溢したと云うことでしょうか。小林は「愛する者のために死んでも良いという勇気を持つものは『愛するものを育てた国のために』自分を越えること」と云っているとのことです。

公と私をどうとらえるか、またまた難しい問題です。

グスコープドリの伝記³⁹⁾

私は宮沢賢治の『グスコープドリの伝記』という童話を思い出します。ブドリはイワトーヴォの出身ですが、少年時代冷夏を経験します。成長するにつれて、そうした冷夏の被害を軽減するために科学者を志します。ある年の夏、また冷夏がやってくると予想されました。それを防止するにはクラカトア火山島を爆発させればよい。そうすると空気中の炭酸ガスが増えて、温暖化効果により冷夏が防げる。クラカトア火山というのは実際にジャワ島にあります。ただ島ではありません。また火山の爆発の実際では噴煙により太陽光が遮られて、温度低下が起きるようですが、お話しでは爆発により冷夏が防げることになっています。ブドリの童話では、火山を人工的に爆発させるには、最後に爆薬に点火する人は、生きては帰れない、しかし、冷夏を防ぎ多くの人を救うためブドリは一人ボートでクラカトア火山島にむかいます。

(参考文献)

- 1) D. クイン・ミルズ著, 林大幹訳, 『アメリカ CEO の犯罪』, シュプリンガー・フェアラーク東京株式会社, 2004.
- 2) マイケル・サンデル著, 鬼澤忍訳, 『これからの「正義」の話をしよう』, 株式会社早川書房, 2010.
- 3) 『世界大百科事典 (CD-ROM)』, 日立デジタル平凡社, 道徳の項.
- 4) マックス・ウェーバー著, 中山元訳, 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』, 日経 BP 社, 2010.
- 5) アリストテレス著, 林功一訳, 『ニコマコス倫理学』, 京都大学学術出版会, 2009.
- 6) 山本七平, 『日本資本主義の精神』, 株式会社 光文社, 1980, p. 14.
- 7) 梅津光弘, “ビジネスのための倫理学入門シリーズ (9) 日本の倫理思想”, 『経営倫理 (6)』, 2000, p. 25.
- 8) 佐藤正英, 『日本倫理思想史』, 東京大学出版会, 2003, p. 28.
- 9) 司馬遼太郎, 『この国のかたち 二』, 株式会社 文芸春秋, 1995, p. 77.
- 10) トマス・ブルフィンチ, 大久保博訳, 『ギリシャ・ローマ神話』, 角川文庫, 平成 5 年.
- 11) 梅津 p. 24.

- 12) 梅津 pp. 24-25.
- 13) 佐藤前掲書 pp. 82.
- 14) ミズル前掲書, p. 221.
- 15) 関谷新助, 『権力と倫理思想』, 法律文化社, 1993, pp. 30-31.
- 16) 山本前掲書 p. 27.
- 17) 同上 p. 68
- 18) 同上 p. 90.
- 19) 同上 pp. 76-77.
- 20) 同上 p. 139.
- 21) 同上 p. 120.
- 22) 同上 pp. 122-123.
- 23) 同上 p.126.
- 24) 同上 p. 139.
- 25) 『アナトール・フランス短編集』, 岩波文庫
- 26) 山本前掲書 p. 128.
- 27) 同上 p. 129.
- 28) 同上 p. 144.
- 29) 同上 p. 146.
- 30) 同上 p. 147.
- 31) 同上 p. 152.
- 32) 同上 pp. 156-157.
- 33) 末次弘, “近代日本男倫理思想 - - 公・私の論理”, 『白山哲学 (41)』, 55-79, 2007, p. 61.
- 34) 同上 p. 64.
- 35) 同上 p. 67.
- 36) 同上 p. 69.
- 37) 同上 p. 73.
- 38) 同上 pp. 73-74.
- 39) 宮澤賢治, 『グスコープドリの伝記』ポプラ社, 2012.